

仙人通信 224 セーメーバン(1006 m)・大垓山(1177 m)

セーメーバンは、大月北側の岩殿山や宮路山等からなる山塊に位置し、平安時代の陰陽師である安部晴明の終焉の地となった事から命名された山で、三等三角点の山でもある。

浅利川沿いにある森屋荘に車を置かせて頂いて、手前の岩殿方面に向かう橋を渡り・サクラ沢峠からセーメーバン・大垓山を経て森屋荘に戻るコースとした。

森屋荘前の橋を渡り、100 m程進んだ先の土手にセーメーバンを示す道標があり、崖に作られた細い道からのスタートである。檜林の中のコースは、落葉に埋もれた状態で、雪解け以来登山者が皆無の様だ。檜の幹に捲かれた赤いマークを頼りに登る事30分で、トズラ峠からのコースと合流するサクラ沢峠である。ここからは、尾根コースの始まりである。

ヤマザクラ・アセビ・ヤマツツジ等が、又足元では紫のスミレが春を告げてくれていた。25分程で最初のピークである。コースからは、東側に百蔵山が望めた。何と高压線の鉄塔が立ち並ぶ尾根コースである。近くでは6人程で、高压線を守るための伐採作業が進められていた。20分程で次のピークである。太陽は出ているものの霞んでおり、近くを取り巻いている山脈までが視界の限界だ。富士山に期待していたが残念・・・。

サクラ沢峠から丁度1時間でセーメーバンの山頂である。大菩薩峠から連なる黒岳や雁の腹摺山にはまだ雪が見えた。赤松のコースでプラスチック製の階段のある峰があるなど上り下りを繰り返して、やっと40分程で宮路山からのコースの合流である。更に15分で大垓山の山頂である。峰の鞍部に水溜りが多かった事に由来する山名だそうだ。

ここも稍越しではあるが、近くの山脈を眺む事が出来た。何とコース上に6本もの鉄塔が立っていたのは、登山者として寂しさが湧いた。

大垓山から先には道標が皆無であり、落葉に埋もれ人の踏み跡も不確かである。昭文社の地図に合わせて最初のピークを過ぎ、沢を巻く様に下るコースが望めたので急な下りを採った。45分程下った先に折れた道標が落ちていた。本来のコースは右手に曲がるように見えたが、確認する術がない事から、近くを見たら大月方面と書かれた破片が確認出来た。確かに尾根でもあり、峰を避ける捲路らしく見えたので、そのまま尾根を下る事にした。しかし、倒木や枯葉にうずもれたコースで、どうしても登山コースとは思えない。

戻るべきとも考えたが、2つの沢に挟まれた尾根であり、この急勾配を戻る依りはと、勇断してこのまま進む事とした。更に40分程下った点で民家の屋根を確認し、5分程で尾根の先端にある森屋荘の裏山に辿り着く事ができた。

森屋荘の温泉にゆっくりと浸かって癒した4時間半(17000歩)の山旅でした。(R 4.4. 7)

セーメーバン山頂



大垓山山頂



コース上の花達

